

活動に120%生きる哲学

科学的なものの見方を身につけて事物の本質に接近する

(はじめに)

科学的社会主義とは何か——人類の知識の総和としての科学的社会主義
科学的社会主義の構成部分

①哲学／②経済学／③社会主義／④革命論（階級闘争の戦略、戦術）

哲学とは何か？

——世界観（自然と社会に対するものの見方、考え方）に関する学問

唯物論と観念論

● 哲学の根本問題 その1

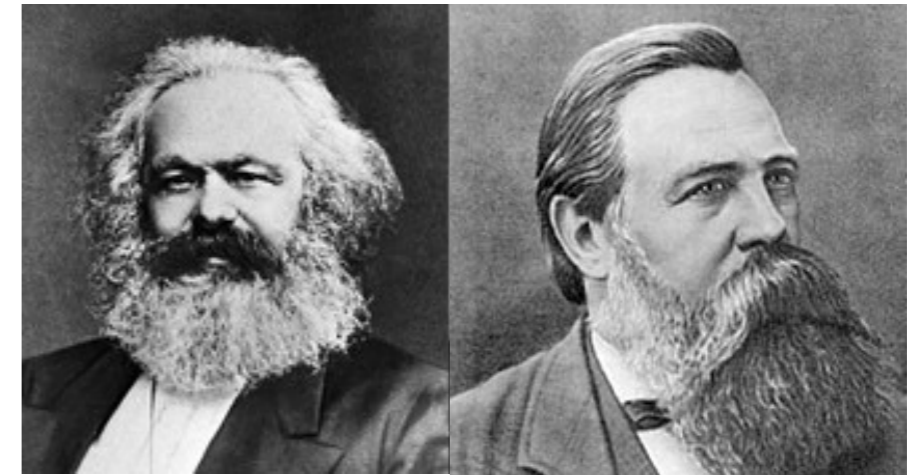
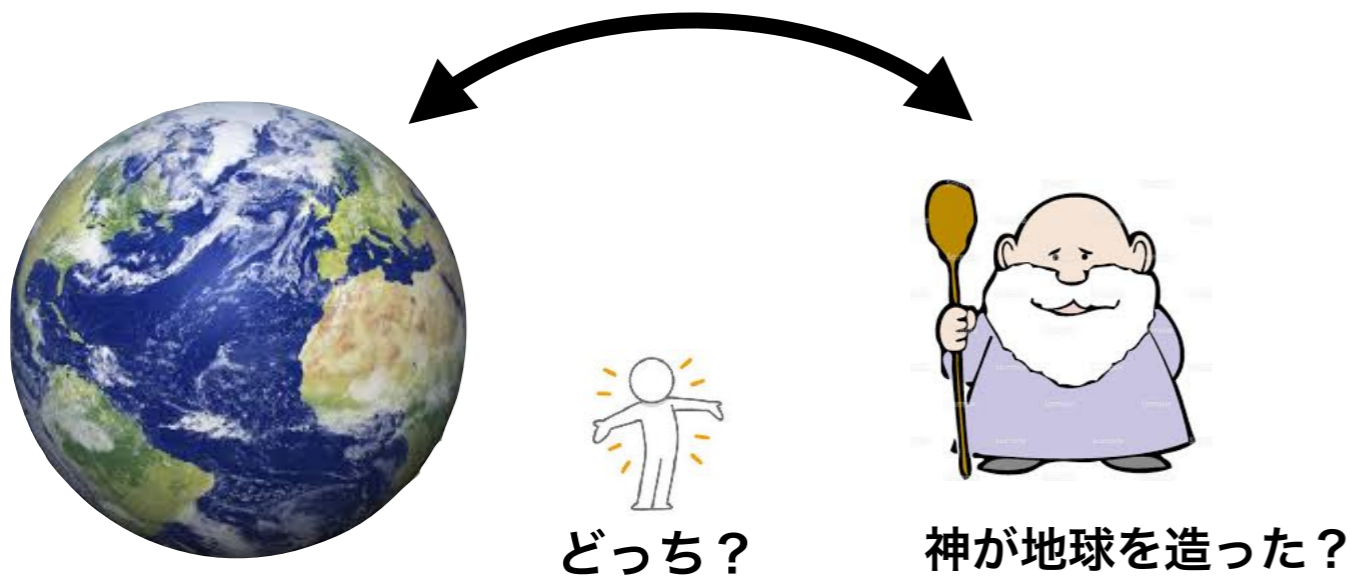
物質を根源的だと見るのか、それとも精神を根源的だと考えるか

● 唯物論とは何か——精神よりも物質を根源的なものとするもの見方

● 観念論とは何か——物質とは独立した精神を根源的なものとするもの見方

主観的観念論——自分の意識の外には何も存在しない。客観的な事物は自分の意識によって与えられたもの。突きつめれば唯我論。

客観的観念論——絶対理念や神が存在し、地球はこれらによって生成され、人間も造られたという世界観。



カール・マルクス
(1818年5月5日 -
1883年3月14日)

フリードリヒ・エンゲルス
(1820年11月28日 -
1895年8月5日)



西郷隆盛
(1828年1月23日
—1877年9月24日)



ウラジーミル・イリイチ・レーニン
(1870年4月22日 - 1924年1月21
日)



徳川慶喜
(1837年10月28日
—1913年11月22日)



勝海舟
(1823年3月12日
—1899年1月19日)

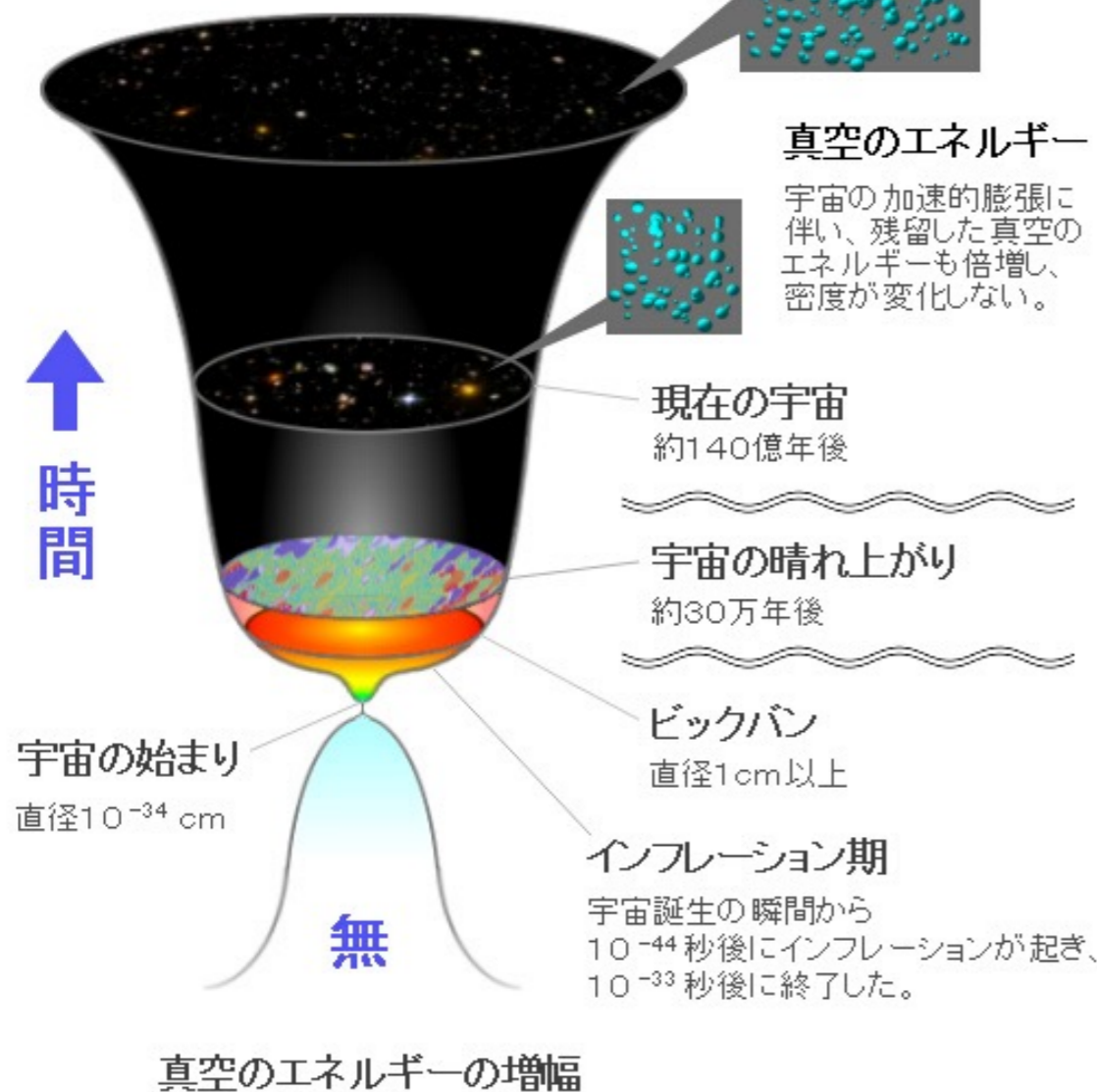
唯物論の立場に立っているかどうかの3つの質問

1. あなたは、人間が生まれる前に地球があったと考えますか
2. あなたは、人間がものを考えるとき、脳の助けを借りていると思いますか
3. あなたは、他人の存在を認めますか

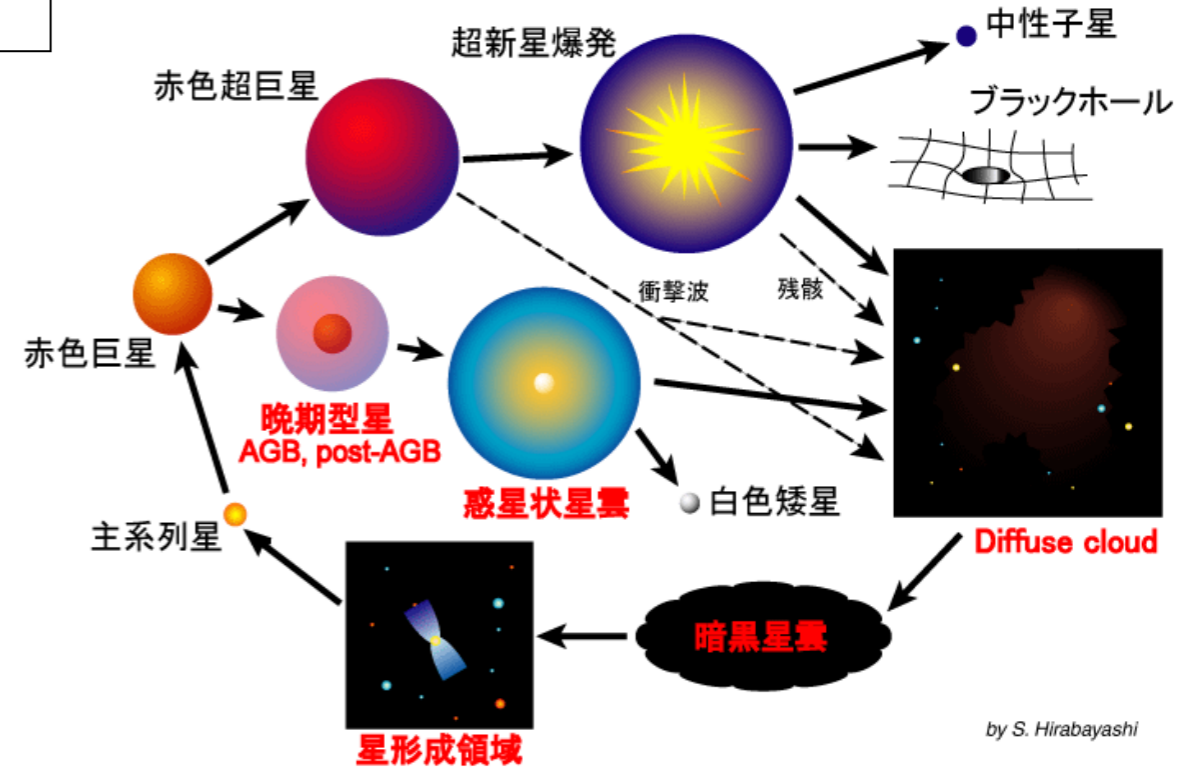
宇宙の歴史 150億年

未来の宇宙

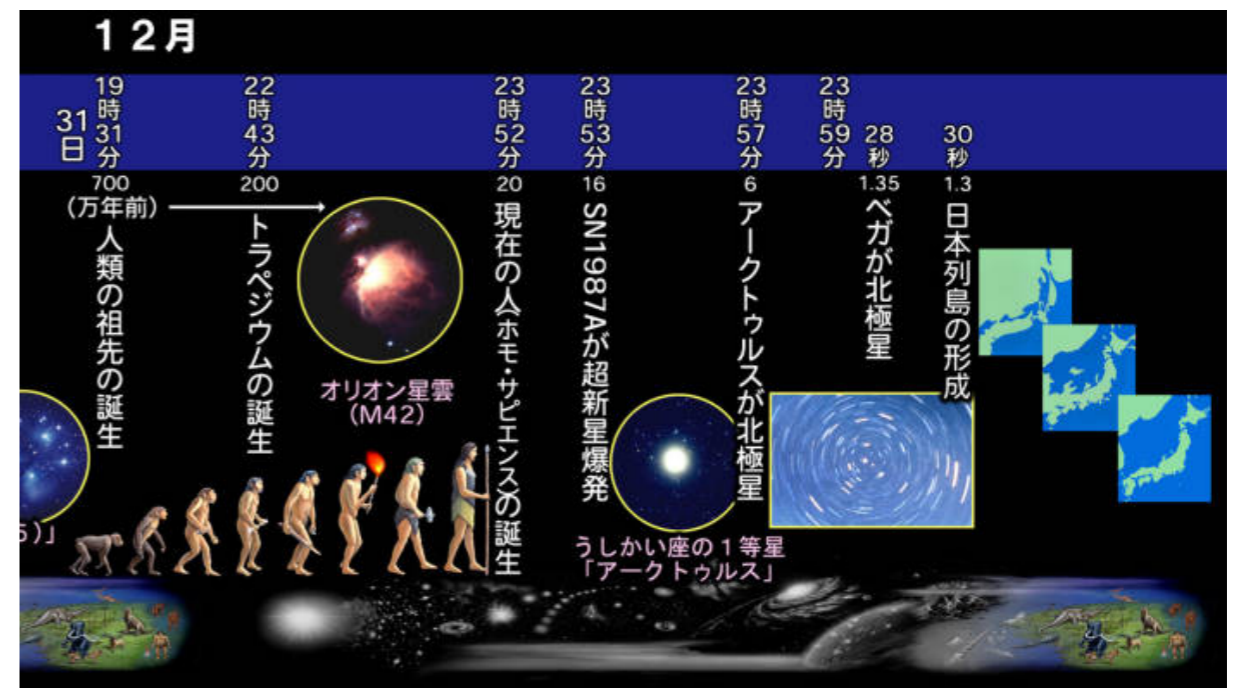
加速的膨張を続ける宇宙では
物質(ガスやチリなど)の密度が徐々に薄まる。
↓
物質の孤立化



恒星の誕生と消滅、循環



地球の歴史46億年を1年に例えてみると



物質とは何か

「物質とは、人間にその感覚において与えられており、われわれの感覚から独立して存在しながら、われわれの感覚によって模写され撮影される客観的実在を言い表す為の哲学的カテゴリーである」 (レーニン)

哲学上の物質と物理学上の物質の違い

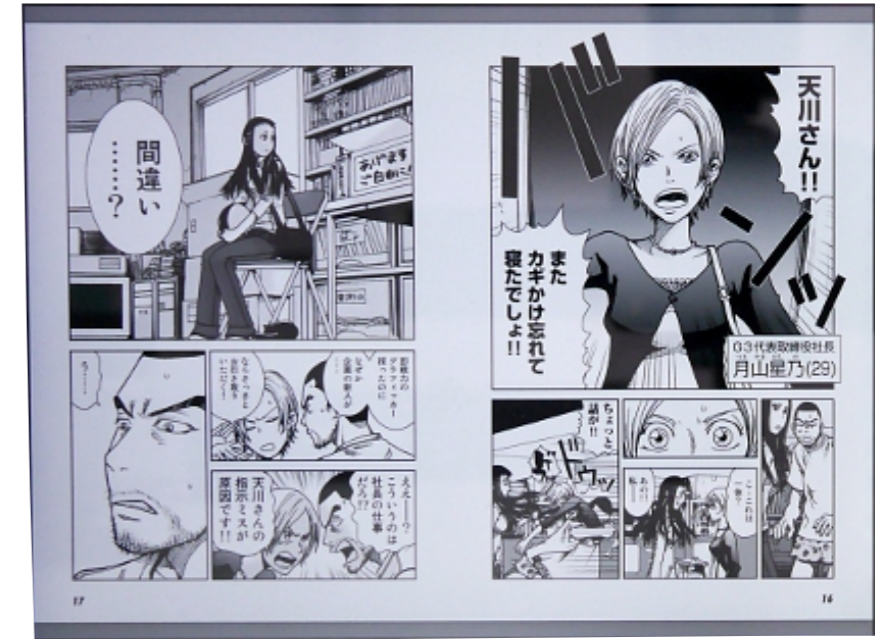


音は哲学でいう物質なのか

西洋音楽では、次の3つの要件が必要であるとしている。1. 材料として音を用いる。2. 音の性質を利用して組み合わせる。3. 時間の流れの中で素材（音）を組み合わせる。そのため、リズム（律動）、メロディー（旋律）、ハーモニー（和声）をもつものが音楽とされる。つまり、音楽は時間の中に組み立てられた芸術であり、絵画や彫刻を芸術空間とよぶのにたいして、時間芸術ともよび、美学では人為的な音楽は音による時間の表現であると定義する。広くは人間が楽しめたり、意味を感じたりすることのできる音全体のことをさす場合もある。



モナリザ?、マツコ? 絵画は物質なのか



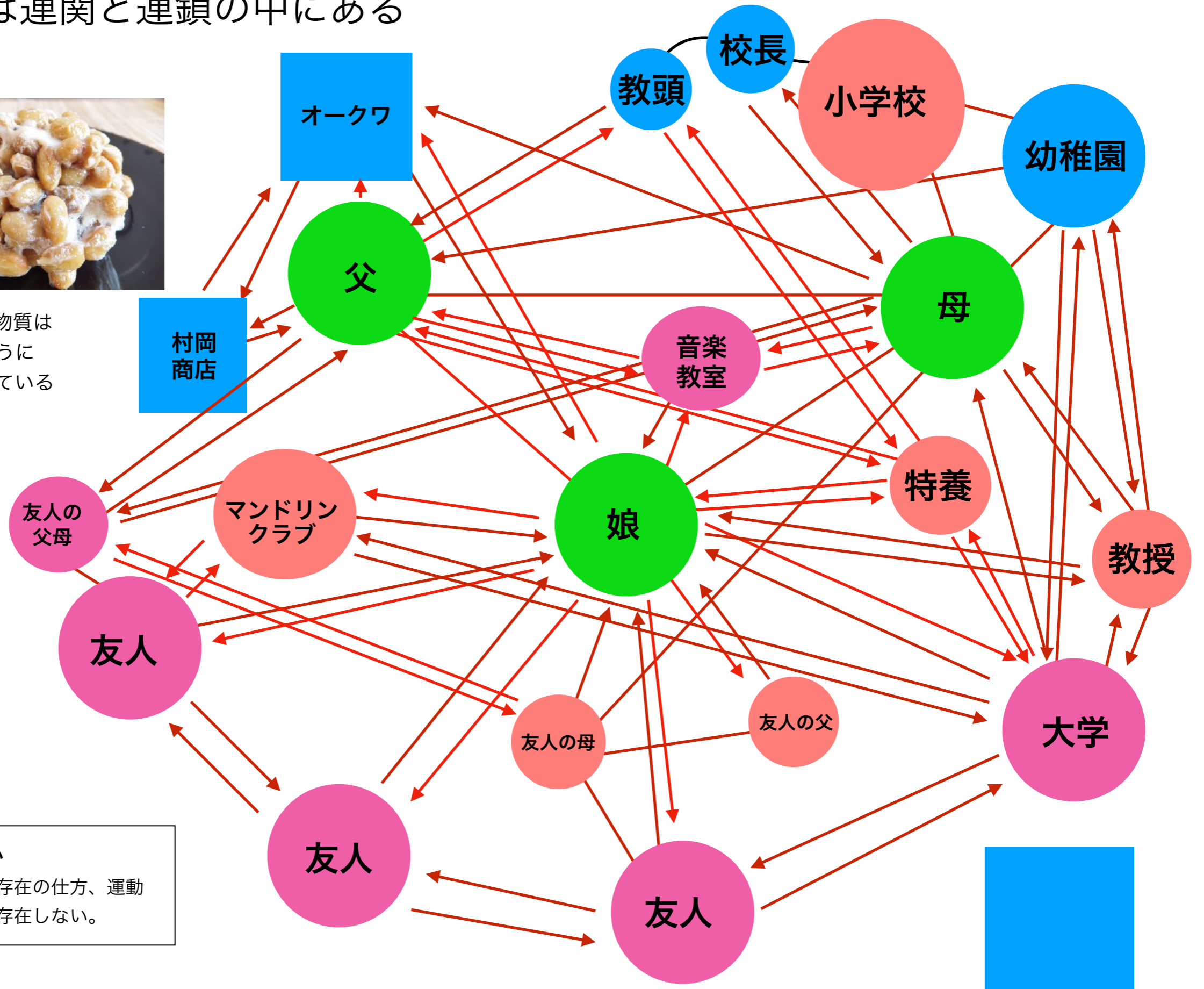
電子書籍の 中の 漫画は 物質なのか



物質は連関と連鎖の中にある

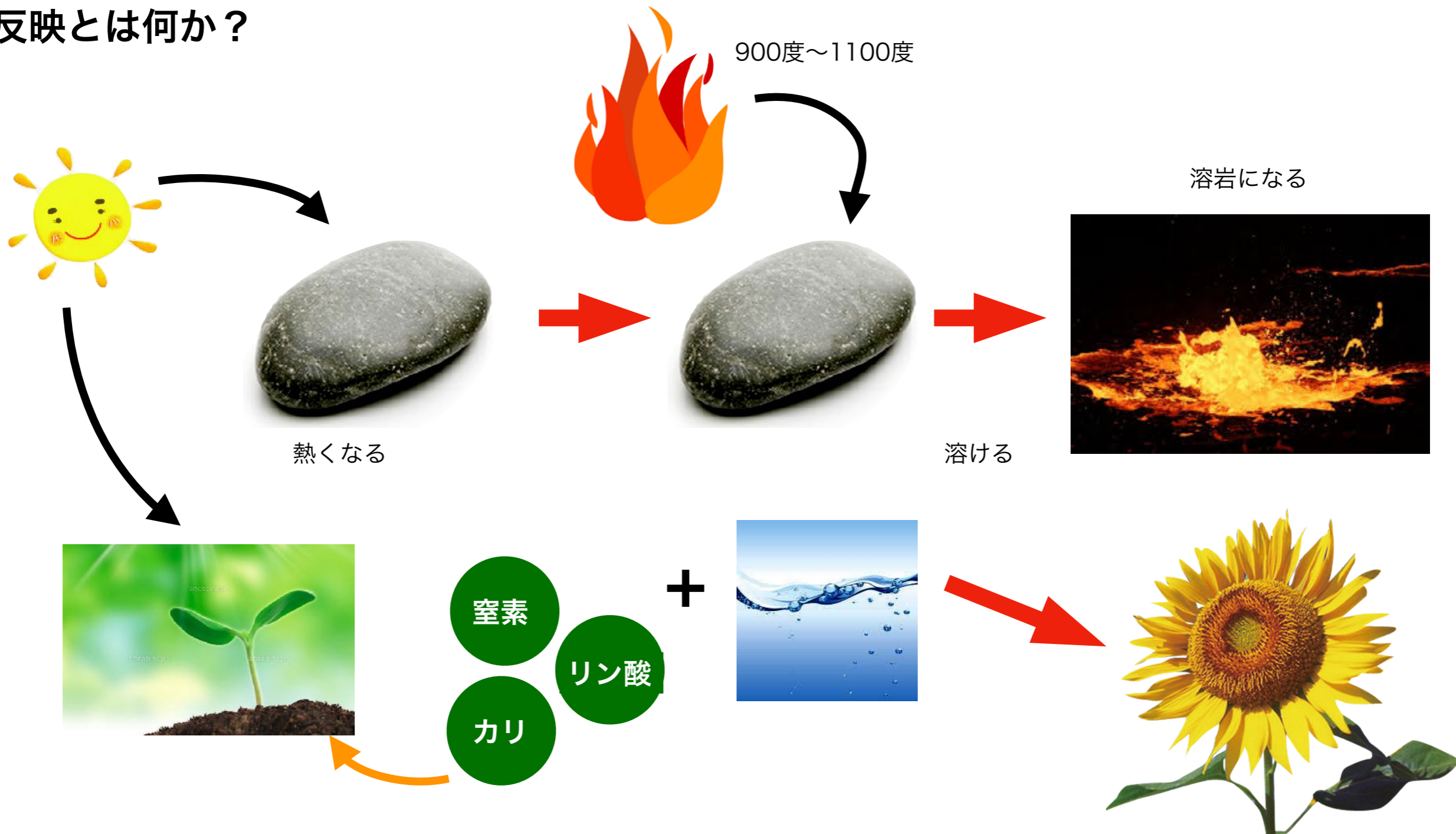


すべての物質は
納豆のように
つながっている



運動とは何か
 運動は物質の存在の仕方、運動
 のない物質は存在しない。

反映とは何か？



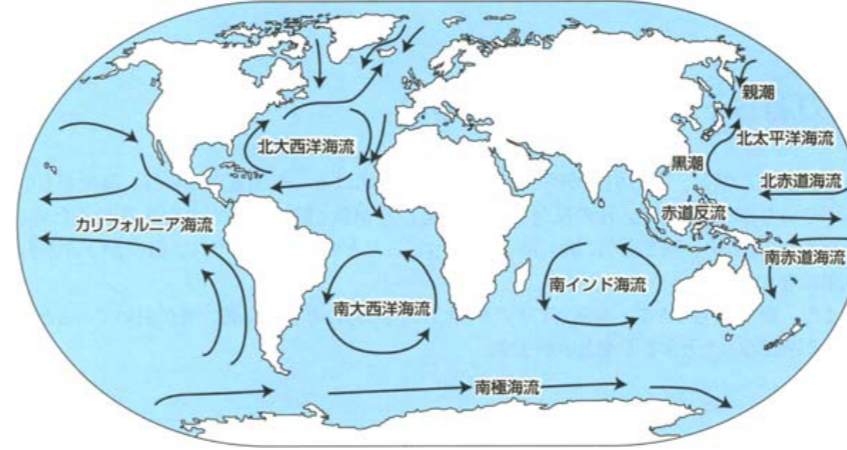
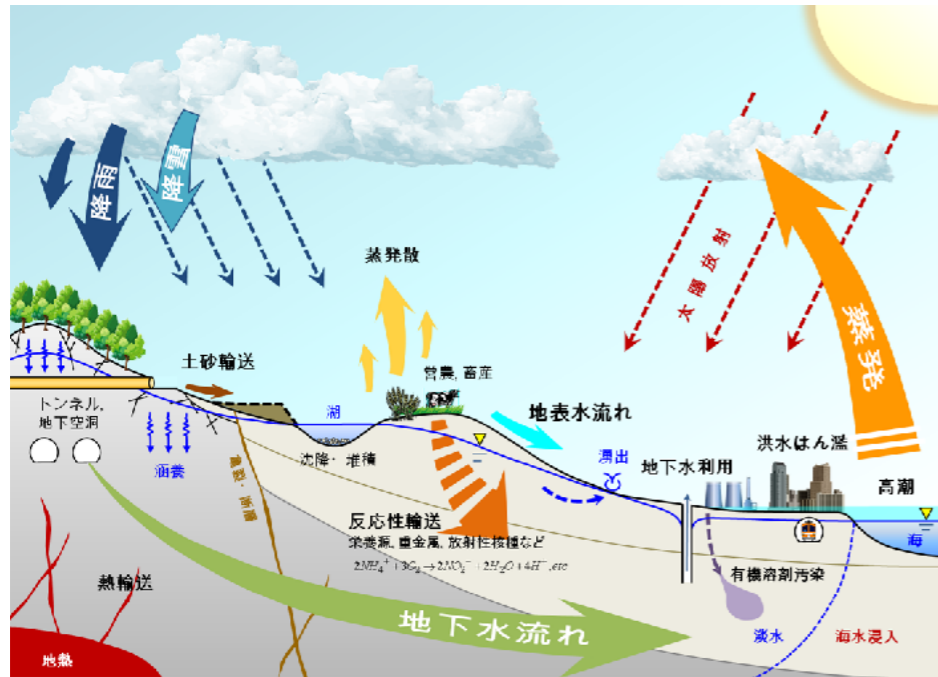
すべての事物は何らかの反映を受けている

相互に反映し合っている場合も多い



反映とは何か？ 連関と連鎖による相互作用

太陽による光と熱は、さまざまな反映を引き起こしている



- 太陽光→植物による光合成
- 植物の成長
- 太陽熱→海岸の砂が熱くなる
- 太陽熱→海や川などの水温の上昇
- 雲の発生、大雨風の発生、カミナリ
- 太陽エネルギーと炭素の循環
- 太陽の熱エネルギーと海流、大気の流れなどなど

ヒトの感覚とは？

外界から与えられた刺激に対する反応（反映）

生物における反映

（感覚～環境を作り変えるまで）

感覚に満ちた世界に生きる植物

植物の環境感覚、刺激受容から細胞応答まで（文部科学省の新学術領域研究より）

動かないという選択をして生きている植物は、光、温度、水分などの様々な環境刺激を感知し、生理機能や形態を柔軟に変化させることで自己の生存を図ってきた。これを我々は「植物の環境感覚」と呼ぶことにする。

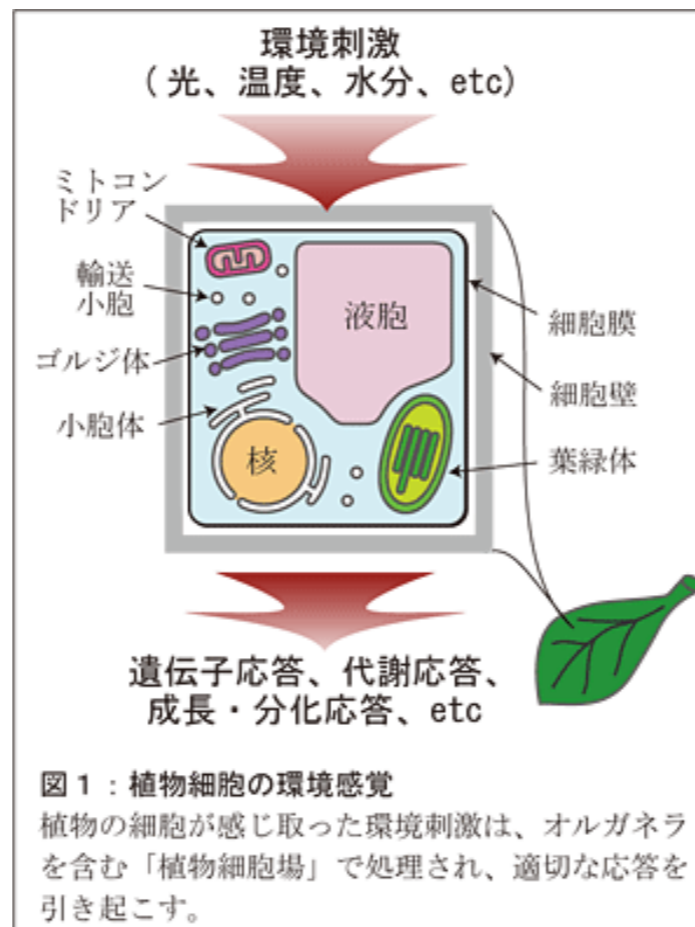


図1：植物細胞の環境感覚

植物の細胞が感じ取った環境刺激は、オルガネラを含む「植物細胞場」で処理され、適切な応答を引き起こす。

【刺激の受容と感覚】

感覚は、動物に対する外部の刺激を受けて生じるものである。この時、刺激を受け取る器官を受容器といい、これは往々にして感覚器官とも言われる。動物は様々な感覚器官を持ち、それぞれがある範囲の種類、ある範囲の強さの刺激だけを受け取ることができる。たとえば、ヒトの目は、短波長側が360nm - 400nm、長波長側が760nm - 830 nmの電磁波（可視光線）だけを受け取ることができる。受容器で受け取ることが可能な最適な刺激を適刺激（adequate stimulus）、又は自然刺激（natural stimulus）といい、さらに受け取れる強さの幅を閾値という^[1]。それぞれの受容器はこのように限られた刺激しか受け取れないので、動物は多数の種類を受容器を持ち、それらは1,2個しかないものもあれば、全身に無数に持つものもある。

いずれにせよ、受容器が受けとった刺激は脳へ伝えられ、そこで動物が外界に反応するための情報として利用される。ここで受け取られた刺激から動物は自分の外の世界を知るであり、それが感覚である。

感覚も反映の一種

【ヒトの感覚分類】

太字はいわゆる五感を示している。

- **体性感覚**：表在感覚（皮膚感覚）と深部感覚。
- **表在感覚**：**触覚**（触れた感じ）、**温覚**（暖かさ）、**冷覚**（冷たさ）、**痛覚**（痛さ）、食感、くすぐったさなどがある。
- **深部感覚**：運動覚（関節の角度など）、**圧覚**（押さえられた感じ）、**深部痛**、**振動覚**がある。
- **内臓感覚**：内臓に分布した神経で、内臓の状態（動き、炎症の有無など）を **神経活動の情報**として感知し、脳で処理する仕組み。
- **臓器感覚**（吐き気など）
- **内臓痛**
- **特殊感覚**：**視覚**（目で見える）、**聴覚**（耳で聞く）、**味覚**、**嗅覚**、**前庭感覚**（平衡感覚）がある。
- **視覚**：光を網膜の細胞で神経活動情報に変換し、脳で処理する仕組み。
- **聴覚**：音波を内耳の有毛細胞で神経活動情報に変換し、脳で処理する仕組み。
- **味覚**：食べ物に含まれる化学物質（水溶性物質）の情報を、舌、咽頭、喉頭蓋などの味覚細胞で神経活動情報に変換し、脳で処理する仕組み。
- **嗅覚**：鼻腔の奥にある嗅細胞で、空気中の化学物質（揮発性物質）情報を神経活動情報に変換し、脳で処理する仕組み。
- **前庭感覚**：内耳の半規管などで、頭部の傾き、動き（加速度）などを神経活動情報に変換し、脳で処理する仕組み。

他の感覚[編集]

- **平衡覚**（前庭感覚）：平衡（身体の傾き、全身の加速度運動）に対する知覚であり、内耳の流体を含む腔に関係する。方向や位置確認も含めるかどうか意見の相異があるが、以前の奥行感覚と同様に"方向"は次感覚的・認知的な意識だと一般的に考えられている。
- **固有感覚**（運動感覚）：体に対する意識（筋、腱内の受容器による筋、腱、関節部の緊張の変化）の知覚である。ヒトが大きく依存する感覚であり、しかしながら頻繁に意識されない感覚である。説明するより更に簡潔に明示すると、固有感覚とは、体の様々な部位の位置する場所を感じているという"無意識"である。これは目を閉じて腕を周りに振ることで演示することができる。固有感覚機能が正確だと思い込んで、どの他の感覚にも感知されていないにもかかわらず、直ぐに実際にある手の位置の意識が無くなるだろう。
- **什痒感**：いわゆる「痒み」の感覚。長い間「痒みは“痛み”の軽いもの」と思われていたが、近年、独立した感覚である可能性が示された^[2]。

感覚の発展としての意識

意識とは何か

意識は、高度に組織化された物質であるところの人間の身体の機能（働き）。人類が誕生し、直立歩行に進化し、脳が発達し言語が発達することによって、意識が生まれてきた。

着ている服によって意識が変わる



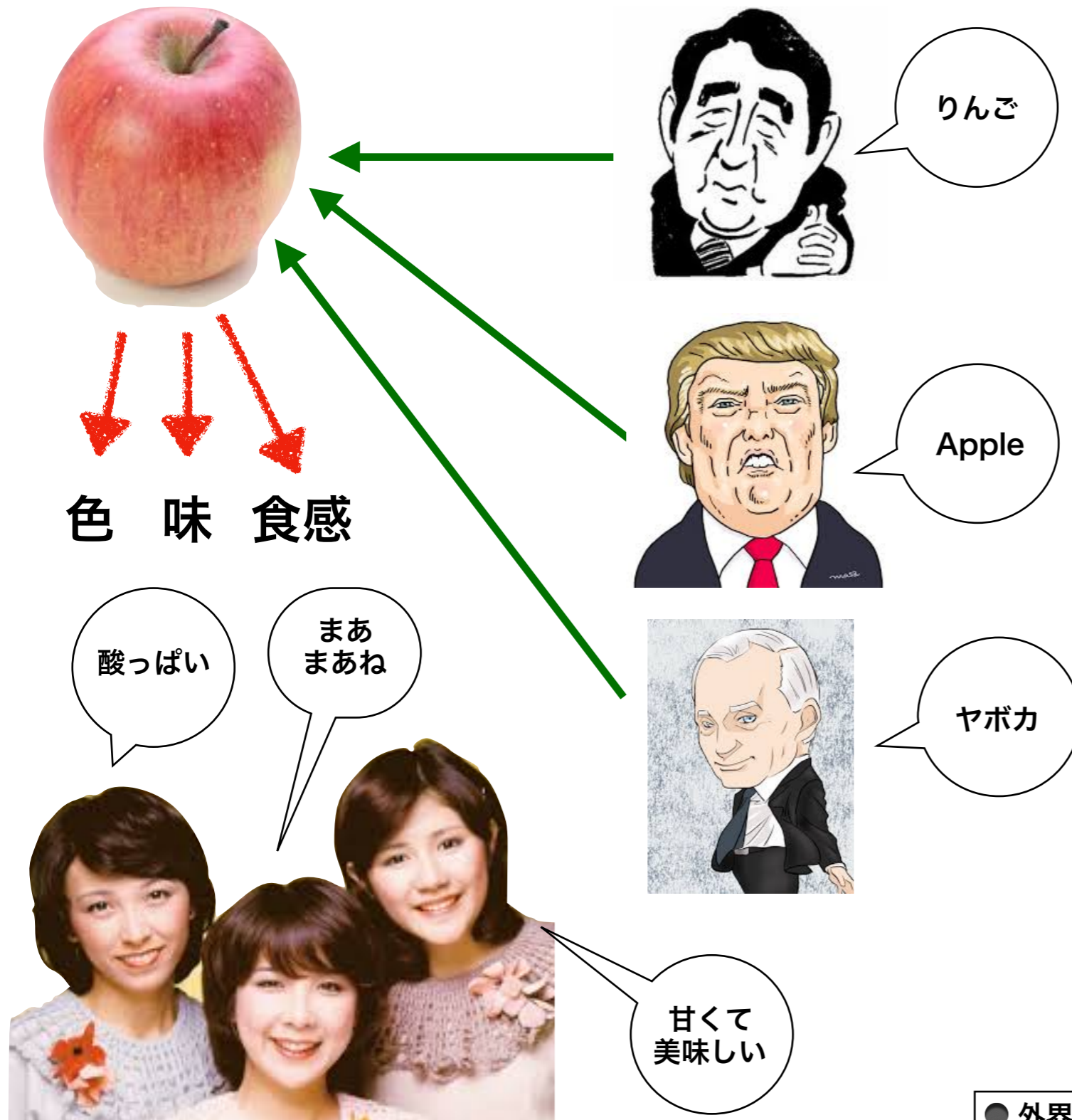
部屋の照明によって意識が変わる



人間は体全体の器官を通して意識をもち、認識している

● 哲学の根本問題 その2

人間は人間の意識の外にあるものを正確に認識することができるか



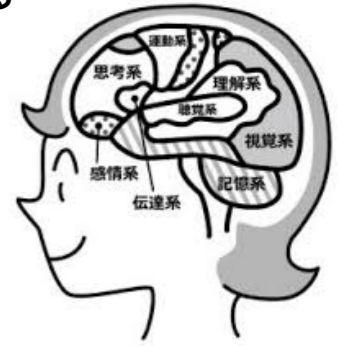
● 人間は脳の助けをかりてものを考える

人間は、体全体のさまざまな感覚器官を通じて、りんごから色々な刺激を受けて反応し、意識を持つ。

りんごを認識するためには、まず視覚でりんごを見て、りんごをすでに知っている人であれば、瞬時にこれがりんごであることを認識する。

手に持てば、触覚でりんごの材質を判断し、食べれば、舌、歯などで味や食感を感じる。

それらの情報は脳に伝わり、美味しい、美味しくないというような感情を呼び起こす。同じりんごを食べても、人によって違った感想（認識）が出てくる。



● 人間は言葉を通じて事物を認識する

人間はすべて外界からの情報（この場合はりんごについて）を脳の助けをかりて認識する。しかも生まれ育った言語体系の中で身につけた言葉を使ってりんごを認識する。つまり、人間は言葉を活用して、外界の事物を認識しており、言葉なしには、複雑な事物を認識できない。

脳の助けをかりて認識するということは、すべての人間の認識は、脳という主観を通じて事物を認識するという他にない。同じりんごを食べても、美味しいかどうか、意見が分かれるのは、そのためだ。

● 農協がおいしさを保証するしくみ

糖度やさまざまな指標を活用してりんごを選果。農協は「おいしいりんご」として値段を付けている。これができるのは、糖度センサーなどによって、人間が美味しいと感じる糖度がりんごの場合はどれだけ必要かという認識のもとでりんごを選果している。これは、人間が外界を正確に理解できることを示しているのではないか。

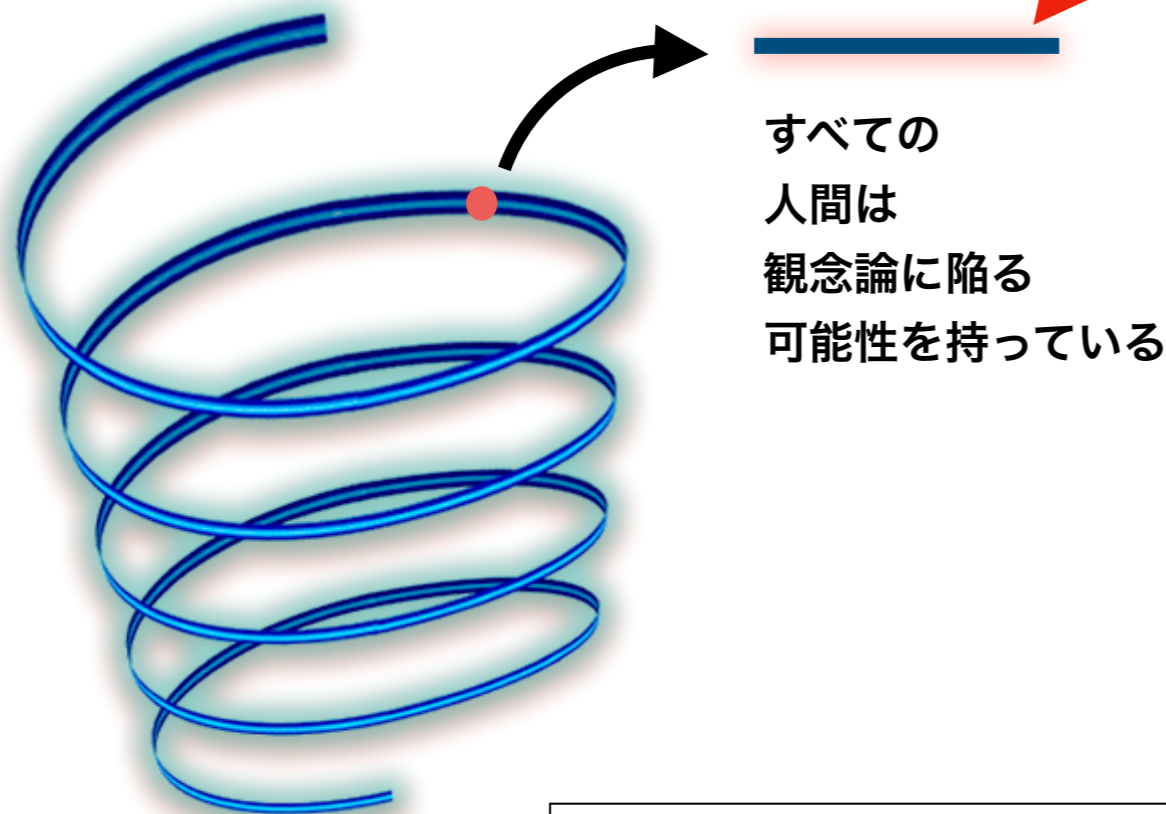
● 外界を正しく認識できているかどうかは実践によって決着する

認識論

人間の意識は客観的世界を正しく反映（とらえる）することができる。

- ▶ 人間は、客観的世界を正しく認識することができる
- ▶ 客観的事物（物質）に対する人間の認識には、壁がない。人類は、科学が発展するに従って、物質の真理に接近する。
- ▶ 人間は一度に全てのものを認識できない（歴史的にも空間的にも）
- ▶ 人間は、自分の感覚器官を通じ脳を通じてものを認識する——主観を通じて物事を認識するということ
- ▶ 人間は言葉を使って事物を認識する。言葉は、事物を一般化してとらえるので、人間の認識は、たえず不完全にならざるをえない。したがって、すべての人間は主観的な観念論に陥る傾向をもっている。そこからはのがれられない。

「人間の認識は直線ではなく（あるいは直線をえがいてすすむものではなく）、一列の円へ、螺旋へ無限に近づいていく曲線である。この曲線のどの断片、破片、一片も、独立の、まったくの直線に転化する（一面的に転化する）ことができる、そのばあいにはこの直線は（木を見て森を見ないならば）泥沼に、坊主主義に導いていく（ここで支配階級の階級的利害がその直線を固着させる）。直線性と一面性、硬直と化石性、主観主義と主観的盲目性、これが観念論の認識論的な根である。ところで坊主主義（＝哲学的観念論）には、もちろん、認識論的な根がある。坊主主義は根拠のないものではない。それは疑いもなくあだ花であるが、しかしそれは、生き生きとした、実をむすぶ、真の、強力な、全能な、客観的な、絶対的な人間認識の、生きた木についてのあだ花なのである」（レーニン 「弁証法の問題によせて」 哲学ノートからの抜粋）



すべての
人間は
観念論に陥る
可能性を持っている

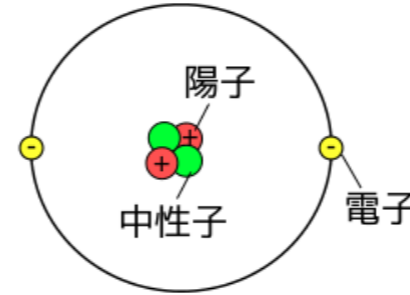
● 存在が意識を規定する

社会的存在＝階級 社会的立場が
社会的意識を規定する

● 社会的存在が社会的意識を規定する

徹底的に唯物論に立って考えることが観念論を克服する道

すべての事物は 弁証法的に存在している



弁証法の3法則について

弁証法には、基本法則がある。この基本法則は、自然科学や社会科学の発展によって、（人類の長期の研究によって）具体的事物の中に具体的に発見されてきたもの。弁証法のものの見方、考え方を知ったとしても、3つの法則を具体的な事物の中に発見できるものではない。ただし、知っておくことは重要。

① 対立物の統一

すべての事物は、対立物の統一と闘争、対立物の同一、対立物の相互浸透（1つのものの中にある相反する2つの傾向）を形成している。

電気の+と-、原子の陽子と電子、磁石のNとS、作用と反作用、資本家階級と労働者階級、商品における使用価値と価値、人間の労働における具体的有用労働と抽象的人間労働、生物の同化と異化、人間の生と死、光子における粒子と波長など

② 量から質への転化もしくはその逆の法則

原子の周期表、気体・液体・固体（融点、沸点、凝固点）、事物における質と量の関係など

③ 否定の否定

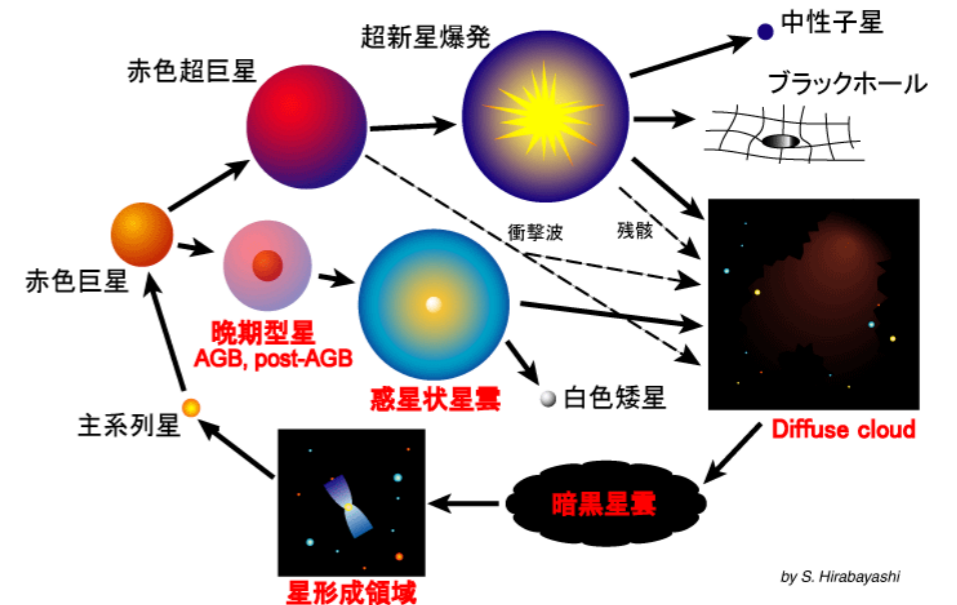
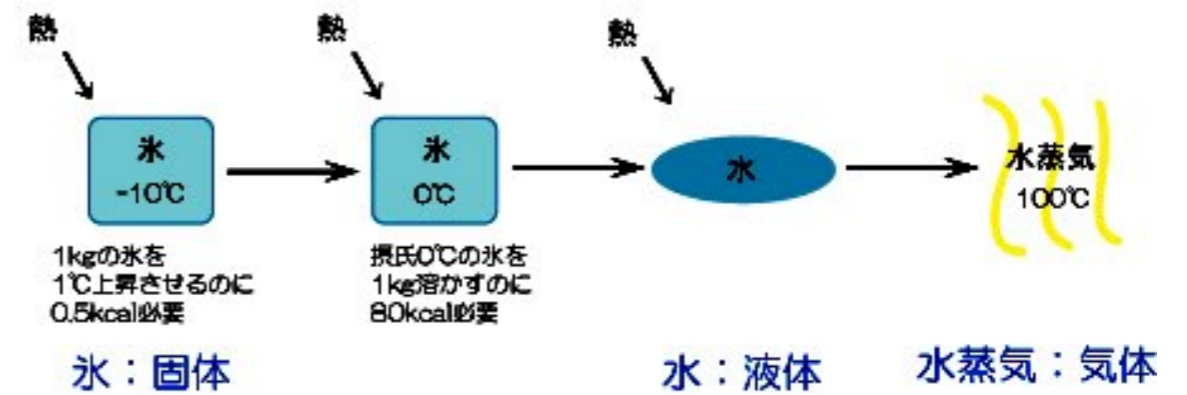
対立物の統一や量から質への転化を通じて、物事は螺旋的に発展する。

原始共産制→階級社会→社会主義、種→植物→種という過程を繰り返し進化する。動物の誕生、生成、死滅の過程も同じ。

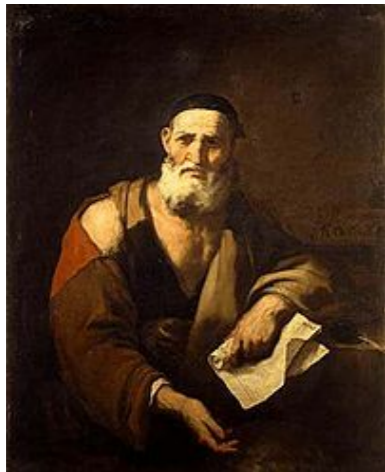


量的変化 ⇒ 質的变化

物質の内部エネルギーの量的変化

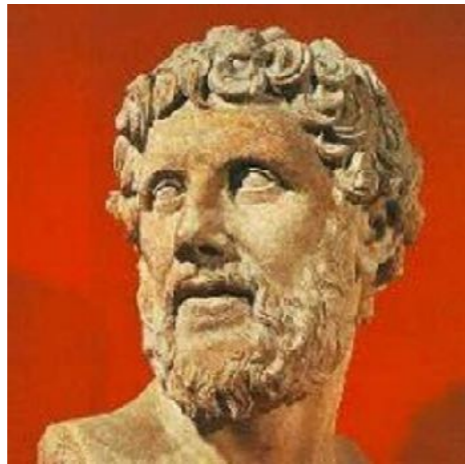


対立物の統一の発見に至るまで 原子の発見には2200年以上かかっている

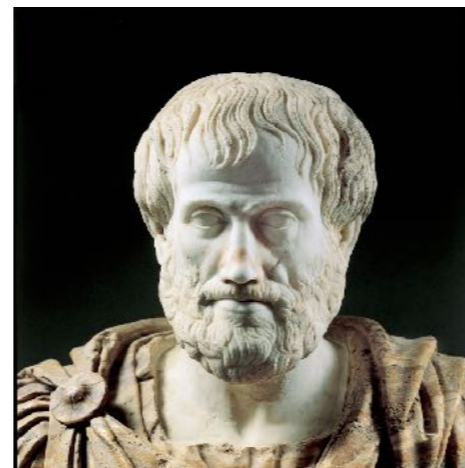


レウキッポス

「物質」が「極めて小さく不変の粒子」から成り立つという仮説・概念は、紀元前400年ごろの古代ギリシアの哲学者、レウキッポスやデモクリトスに存在した。だが、この考えは当時あまり評価されたとは言えず、その後およそ二千年ほど間、大半の人々から忘れ去られていた。



デモクリトス



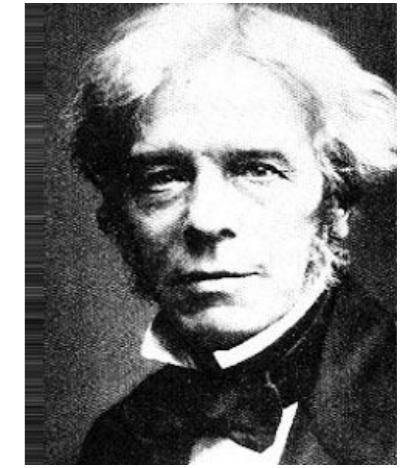
アリストテレス

原子論 atomism の否定
(科学の発展を遅らせた人物とも言われている)



ドルトン

化学的現象の説明として原子説 (18世紀)



ファラデー

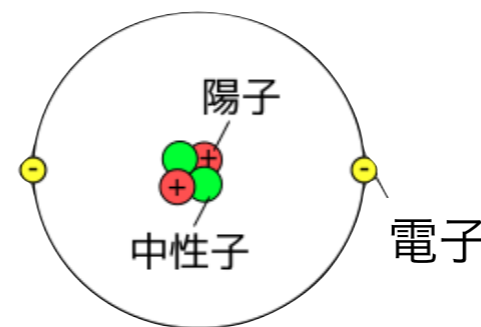
電気分解についての考察から原子とはまた別に電氣的な粒が存在するかもしれない(原子の内部構造) 19世紀

紀元前400年

2200年

1800年代

原子の発見、原子構造の解明に至るまで。2200年以上かかっている。



＊ 弁証法と詭弁について

弁証法は、客観的事物である物質が、弁証法的に存在しているという事実の上に立っている。

弁証法は、必然的に唯物論と一体のものであり、具体的事物の具体的探究を通じて、具体的事物の中に弁証法を発見する。ここに事物の真実に接近する道がある。弁証法は、事実から離れると詭弁に陥る可能性を持っている。弁証法の法則を機械的に当てはめると詭弁になる。詭弁は、認識論的には観念論である。

マルクス 商品には使用価値と価値という2つの側面がある



マルクスはどのようにして商品の2つの側面を発見できたのか？

弁証法的なものの見方の基本

① ひとつのものを世界の連関の中でとらえる (エンゲルス)

すべての事物、すべての現象を、孤立したものとしてとらえるのではなく、諸事物、諸現象の全般的な連関の網の目のなかでとらえ、一見ばらばらに見える事象の間のどんな連関をも見逃さないこと。
(不破「マルクスは生きている」 新書)

② すべてを生成と消滅、運動と変化のなかでとらえる (エンゲルス)

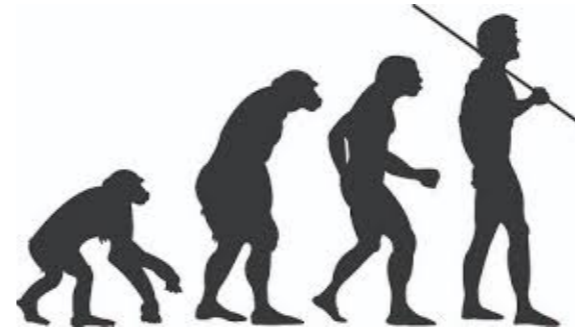
自然と社会のすべての現象を、異なる固定的なものとしてとらえる立場をしりぞけ、それらをたえまない変化と運動、なかでも前進的な発展の流れのなかでとらえること。
自然と社会の発展の過程には、多くの対立や矛盾、主流と逆流などが必然的に含まれているものであり、さまざまな事象を一面からだけ見る単純化は警戒しなければならないこと。(不破「マルクスは生きている」 新書)

③ 固定的な境界線や「不動の対立」にとらわれない。反対物への転化も視野に入れる (エンゲルス)

自然でも社会でも、その発展過程の分析にあたって、量的発展と質的発展のあいだの相互転化、否定の否定、対立物の闘争(あるいは相互転化)などの諸法則の現れを、注意して追跡すること。(不破「マルクスは生きている」 新書)



資本家と労働者、相互に転化



人類の進化=運動



海岸線、どこからが海か陸か

海岸線/地図 春分の日
満潮時を採用
海岸線/海図 春分の日
干潮時を採用

弁証法と形而上学

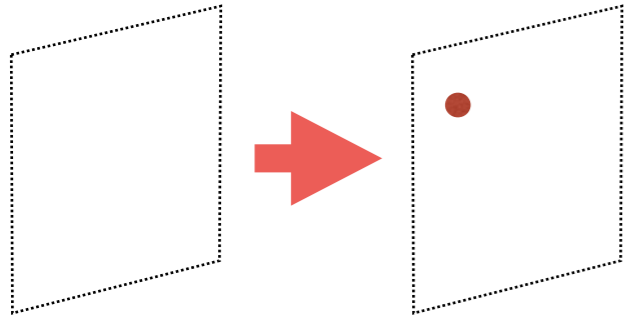
形而上学とは何か —— 一度与えられたら変化しない固定的なとらえかた
弁証法とは何か —— 事物は不断に変化する中で存在している

対立物のとらえかた	変化と運動	連関	
対立物を発展の生きた推進力としてとらえる(対立物の闘争と統一、相互移行)。固定した境界線や「不動の対立」を認めない。	すべてを生成と消滅、運動と変化のなかでとらえる。発展、進歩の契機を重視する。	ものごとを、世界の全般的な連関のなかでとらえる。	弁証法的な見方
ものごとを、白は白、黒は黒といった絶対的な対立のなかでとらえる。	ものごとを、固定した、一度与えられたらそれっきり変化しないものとしてとらえる。	ものごとを、個々ばらばらにとらえる。	形而上学的な見方

弁証法的なものの見方 実践編 ①

1 物事を連関と連鎖の中で捉えるために 全ては比較検討から始まる

① 差異に注目し、比較検討する

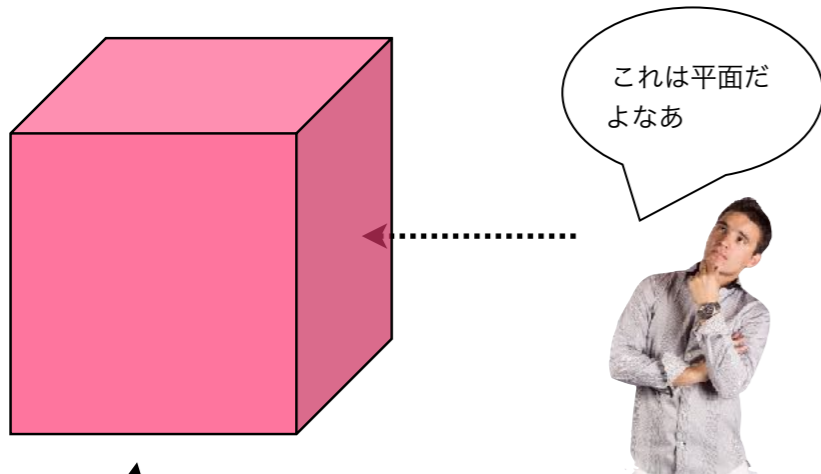


透明なガラス

透明なガラスに赤い点がひとつ

全く曇りも歪みもないガラスが目の前にあったら、人間はガラスを認識できない。でもそのガラスに赤い点が1つあれば、人間はガラスを認識できる。赤い点があるかないか、それが差異ということ。

② 連関と連鎖の中で把握するためには、徹底的な調査が必要



これは平面だよなあ

対象の事物をとらえるとき、一部分しか見えず、なかなか全体が見えない。では、どうやって全体を見るか。一般質問の準備では、テーマを決めたら、できるだけ本や資料を集めて、テーマを視野広く見る努力をする。それがテーマを全体的にとらえること、テーマの連関と連鎖、全体像を見ることにつながる。

調査、聞き取り、資料や本を読み込んでいけば
テーマにした事物の連関と連鎖が見え、
全体像が見えてくる。

繰り返すと認識が深まる



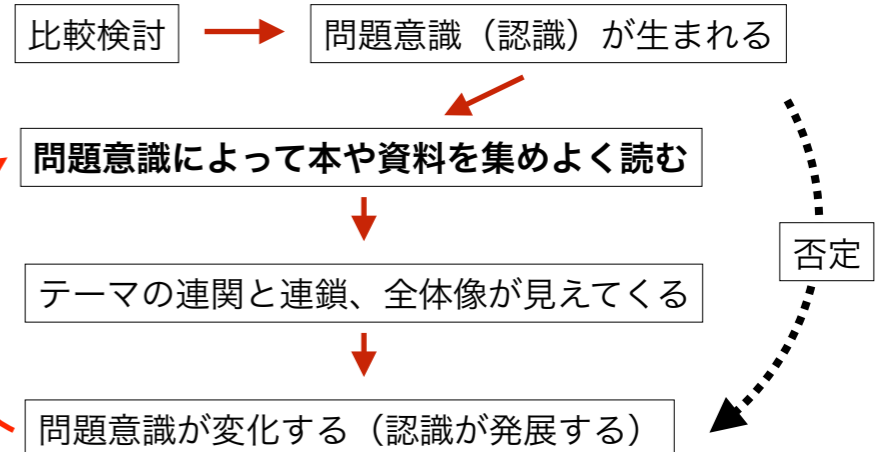
議員活動や党活動に活かすために

予算書を前年度と比較するだけでもいろいろなことが見えてくる。

- なぜ予算が組まれていないのか
- なぜその予算が減額されたのか
- なぜ新しい予算が組まれたのか
- なぜ予算の名称が変わったのか など

予算書の数字は、具体的な事業を金額で表したものの。数字の背景には、法律や条例に基づく制度、担当職員の仕事、その事業の成果と問題点、課題がある。

- 経年的変化を調べる
- 近隣自治体と比較する
- 類似団体と比較する
- 全国的平均と比較する



弁証法的なものの方 実践編 ②

弁証法的見方の基本、神髄はここにある

「弁証法は、現存するものの肯定的理解のうちに同時にまたその否定、その必然的没落の理解を含み、どの生成した形態をも運動の流れのなかで、したがってまたその経過的側面からとらえ、なにものによっても威圧されることなく、その本質上、批判的であり革命的である」（『資本論』、第1巻第2版への後書き）

「現存するものの肯定的理解」

- 現存するものの肯定的理解というのは、現実存在するものには、存在しているだけの根拠や意味があることを素直に認めるということ
自民党も公明党もまずは肯定的に理解する。
公明党は、日本共産党より得票が多い、自民党は日本共産党よりもはるかに多い支持がある。なぜか？ そこにはそれだけの意味や根拠がある。

「現存するものの肯定的理解のうちに同時にまたその否定、その必然的没落の理解を含み」

- 根本的に事に通ずる努力が大切
批判先にありきではなく、まずは肯定的に理解する努力を行ってその事物を根本的に理解する努力が必要。その先に批判的な検討がある。



まとめ

- ▶ 肯定的理解こそが、事物をありのままにとらえる第一歩。根本的に事に通じるためには、肯定的理解が極めて重要。
- ▶ 批判的にとらえるのは肯定的理解の後
- ▶ 差異への注目、比較検討、徹底した調査をしていけば、物事を連関と連鎖の中で把握できるようになる。
- ▶ 歴史的経緯を調べれば運動の中でとらえることができるようになる。

弁証法についての
マルクスの到達点
だと思われる（東芝）

「現存するものの肯定的理解のうちに同時にその否定、その必然的没落の理解を含み、どの生成した形態をも運動の流れのなかで、したがってまたその経過的側面からとらえ、」

● 物質の運動は極めて把握しにくい

運動している事物を把握するのは極めて難しい。人間は、事物の認識を深めるために、運動している事物を静止させて、そのものを要素に分解して研究する方法を採用してきた。

● 事物の発展の歴史を調べると運動を把握しやすい

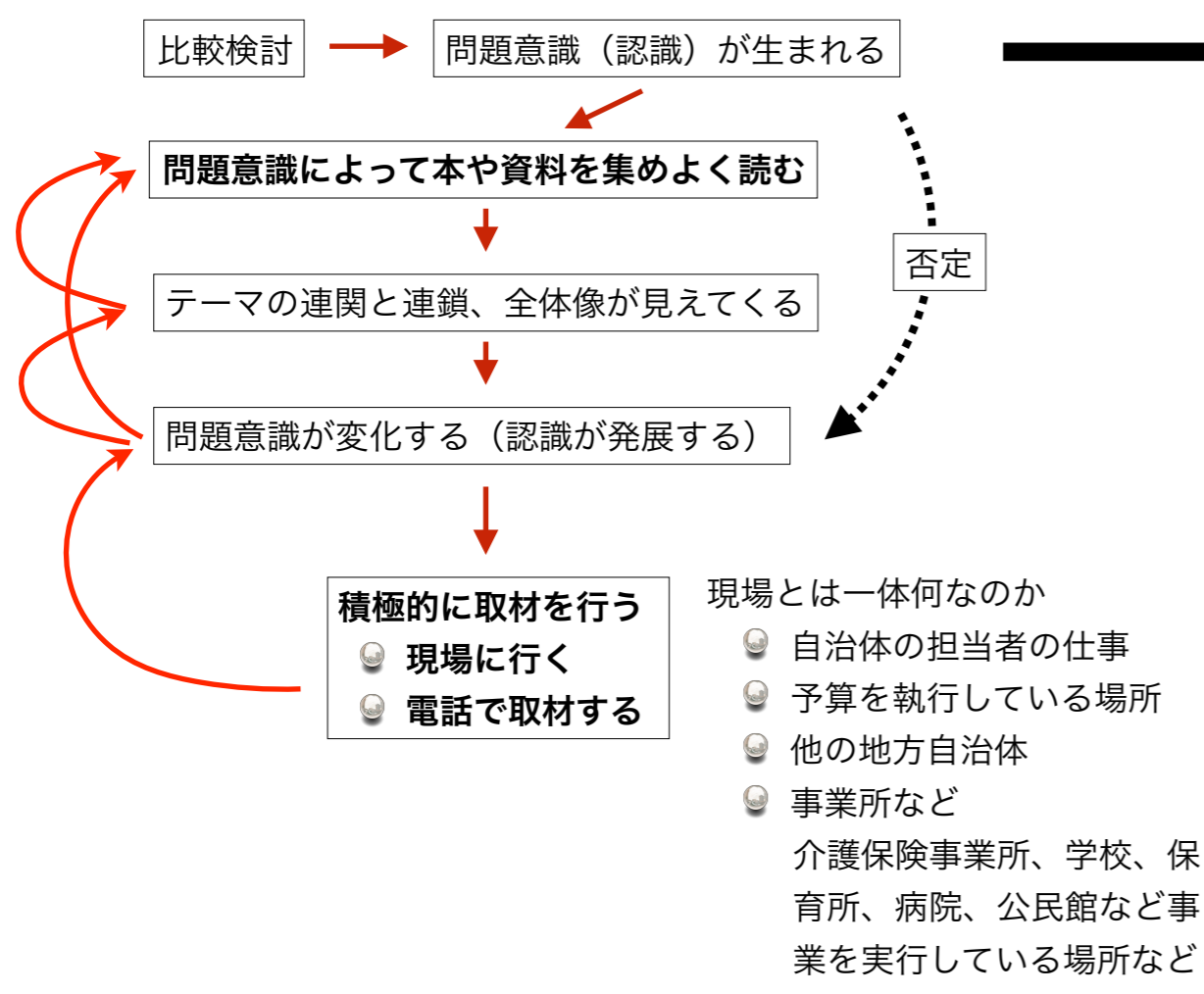
では、どのようにして運動している事物の運動を把握するのか。事物には、必ず生成と発展、消滅をふくむ歴史的経緯がある。この歴史的経緯は、事物の生成の過程である。この生成の過程を調べ、把握すると事物の発展の歴史を把握できる。この努力こそが、事物を運動の中でとらえることにつながる。「経過的側面からとらえ」というのは、運動の流れの中でとらえることに重なる。

弁証法的なものの見方 実践編 ③

実践と認識

一般質問の準備の仕方（東芝議員の場合）

認識は実践なしに深まらない。実践こそ認識を確かめ発展させる基礎



実践的把握

徹底的に本や資料を集める。ネットで論文を検索する。自治体情報や国の情報を集め、よく読む。



必要であれば県庁にも
近隣自治体にも
地方税回収機構
にも行く

発見と感動 驚き

質問原稿作成



電話で北海道から
沖縄まで、関係自治体に電話
で取材する



現場に行く

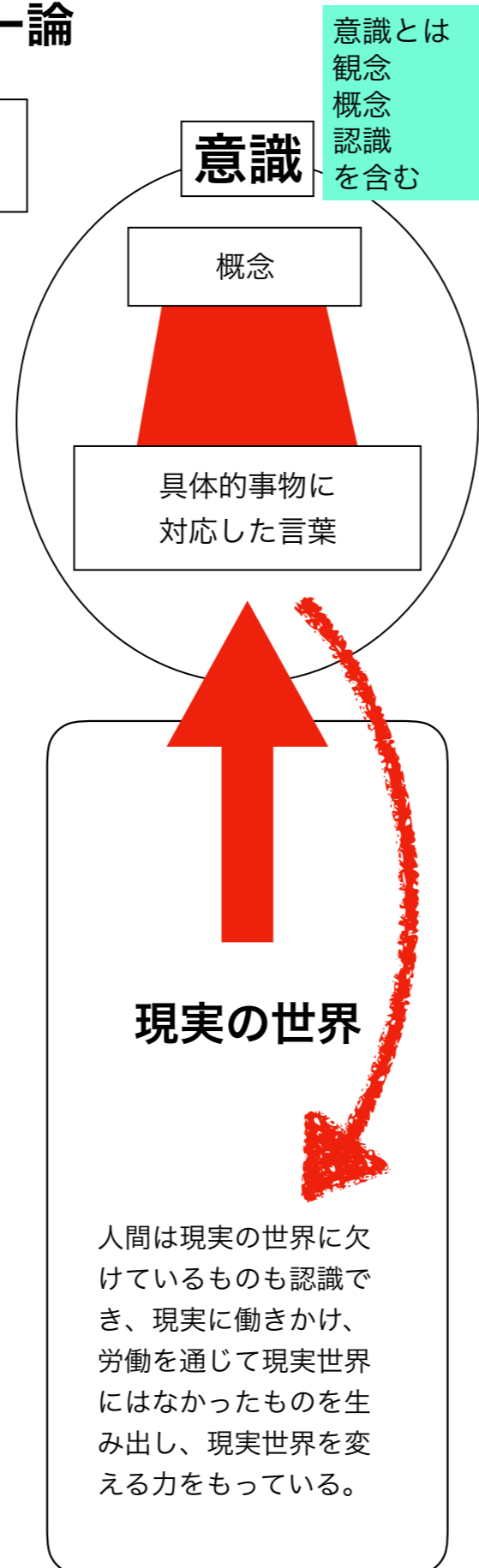
体を動かし、能動的に問題を把握する

仕事は現場で行われている。現場にこそ豊かな情報がある。事物はたえず具体的。具体的事実を知らないと見えないものがある。取材はよく調べて行う。他の自治体に電話するときには、基本点は全部把握した上で取材する。「何も知らないで教えて」という取材はバカにされるし嫌われる。

【発展学習】 概念とカテゴリー論

概念に強くなろう。概念をきちんと理解することが、事物を深く立体的に把握する道。

- 観念 人間の意識は、客観的事物の反映。人間の意識が弁証法的なのは、客観的事物が弁証法的に存在しているからに他ならない。**意識は、客観的事物の反映として存在するが、人間の観念は、人間の意識の外に社会的産物として独自に構成され、観念の世界を組み立てる。**この観念の世界なしに人間は意思疎通を図ることはできない。
- 概念 観念が豊かに発展すると、観念世界の中に抽象的な概念が形成されてくる。**抽象的な概念は、事物の本質を反映しているならば、事物の本質から遠ざかるのではなしに、本質に接近する。事物の本質に迫るためには、概念を活用して事物の本質に迫る必要がある。**自然や社会や経済を理解するためには、概念に対する深い認識が必要。概念を深く認識しないと豊かな認識は形成できない。
- 認識 人間（主観）が事物（客観対象）を認め、それとして知るはたらき。また、知りえた成果。感覚知覚直観思考などの様式がある。知識（大辞林）。人間の認識は、客観的事物の反映。存在は意識を規定する。
- **社会的存在が社会的意識を規定する。**
階級社会における人間の意識は、経済的な利害関係の反映である階級によって分裂している。社会的存在が社会的意識を規定するという命題は、このことを指している。資本主義社会における真理は党派性を帯びる（レーニン）。労働者階級は、徹底的に物事の真理、真実を明らかにすることによって、階級闘争に勝利できる武器を手に入れる。階級社会の支配的な意識は、支配者階級の意識。日本社会もそうになっている。



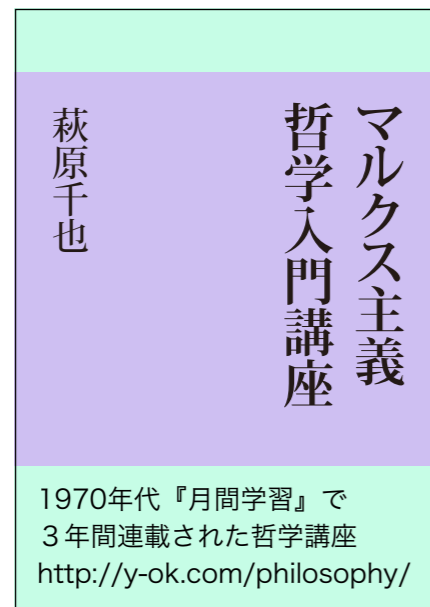
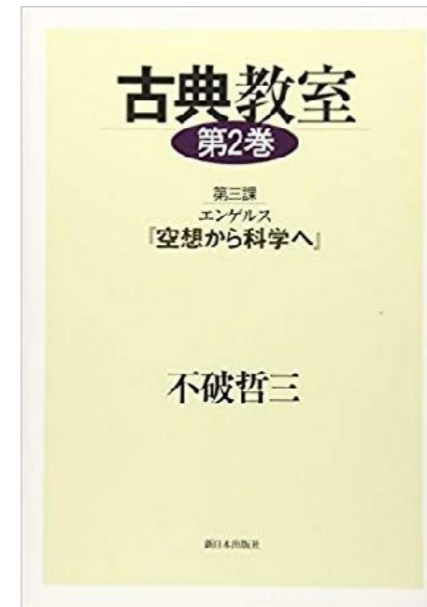
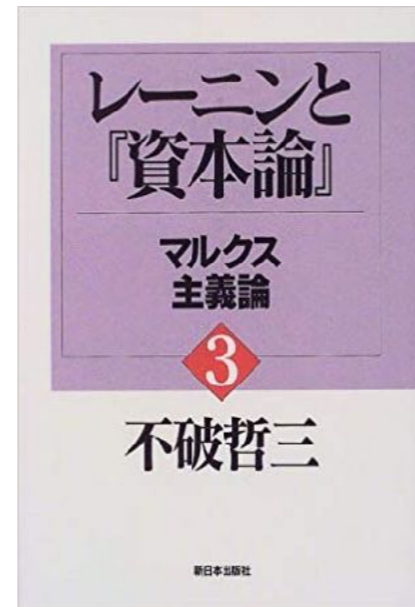
唯物論の立場に立つカテゴリー論

弁証法の認識論（論理学）であるカテゴリー論

論理学において弁証法の理解を深めるためには、カテゴリーを唯物論的に理解する必要がある。普通の論理学は、客観的事物から物事を抽象して認識するという立場に立っているが、弁証法的唯物論は、具体的事物のなかに抽象をみる。具体的事物なしに抽象はありえない。つまり抽象には唯物論的基礎がある。唯物論的基礎から離れた抽象は、具体的事物から離れ観念論に陥る。

- 具体と抽象
具体的な事物の中にある抽象
- 原因と結果
運動の中では、原因が結果になり、結果が原因になり相互に転化する。
- 本質と現象
現象の中に本質がある。現象のない本質はありえない。本質は現象する。本質は、抽象的に導き出される概念ではなく物質的（唯物論的）基礎をもっている。
- 普遍（一般）と特殊
個別的なもの（特殊）の中に普遍的なものが存在する。
- 内容と形式
一定の内容には一定の形式が照合する。内容のない形式はありえない
- 偶然と必然
偶然性の中に必然性が貫かれる。必然性は偶然を通じて表れる
- 肯定と否定
肯定的なものは一時的、変化によって肯定的なものは否定される
- 規定性と否定性
物事を規定するというのは物事を否定することを含む
- 帰納と演繹
個別的なものを通じて法則性を明らかにする帰納、事物の法則から他の事物の法則を明らかにする演繹。帰納と演繹は表裏一体。物事を分析する際に重要な役割を果たすのは帰納。しかし、帰納は事物の証明にはならない。
- 相対的真理と絶対的真理
相対的真理には絶対的真理の粒が含まれている。人間は絶対的真理を一度に認識できない。相対的真理を通じて絶対的真理に近づく。
- 現実性と可能性
現実的なものの中に存在する具体的な可能性。現実に関わりをおかない可能性はありえない。
- 量と質
一定の量には一定の質が照合する。質量のない物質があるとすればそれは極めて一時的。
- 時間と空間
時間と空間には唯物論的な基礎がある。物質が存在してはじめて時間が発生し、空間ができる。時間は物質の運動の仕方（変化）によって計られ、空間は物質の存在の仕方によって発生する。時間は伸びたり縮んだりし、空間は物質の質量によって歪んだりする。物質のないところに時間と空間は存在しない。

参考文献



「科学的社会主義を学ぶ」「マルクスは生きている」「レーニンと資本論3」「古典教室第2巻」不破哲三／
 「唯物論と弁証法」足立正恒／「マルクス主義哲学入門講座」萩原千也